



アンケート結果

雑誌名	人文社会系分野における研究評価：シーズからニ ーズへ：研究大学強化促進事業シンポジウム報告 書
ページ	127-132
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155103

研究大学強化促進事業シンポジウム
人文社会系分野における研究評価指標～シーズからニーズへ～

アンケート結果 26/69 (回答率：37.7%)

◆アンケート項目

- Q1. 本シンポジウムに参加された目的は何ですか？
- Q2. 本シンポジウム後、業務の中で取り組んでみたいと思ったことはありましたか？
- Q3. 「はい」と回答された方は、どのようなことを取り組もうと考えましたか？
- Q4. 今後、同様のシンポジウムが開催されたら、また利用したいと思われますか？
- Q5. 本シンポジウムについて、率直な感想やご意見をお聞かせください。
- Q6. 今後、本シンポジウムにどのようなことを期待されますか？
- Q7. その他のご意見、筑波大学、ならびにURA活動に期待することなどがありましたら、お聞かせください。

【Q1. 本シンポジウムに参加された目的は何ですか？】

- 評価に関心があったから。
- 人社系研究評価の動向を学ぶため
- IMDに関する情報の収集
- 評価をする側の視点からの情報の収集
- IFだけによらず、定量的に研究成果を扱う手法に関心があったから。
- 研究の評価をどのようにすることが出来るのかを学ぶため
- 人文社会の分野における評価システム、評価する側からの意見を知る為
- 研究評価に興味があったから
- 大学は、資金を取るために研究力を定量的なデータをもって説明することを求められている中で、サイテーションによる評価が難しいと言われる人文社会学系の分野にいる方々の考えや実情を知りたかったため。
- 本学の人文社会系研究に関する評価の参考にするため
- 研究活動と評価の在り方についての取組を知りたかったため

- 研究者個人の評価と、組織の評価がどう変わっていくのか興味があった。
- 人文社会系研究評価について、業務上知る必要があるため。
- 人文社会系の研究について学ぶため
- 人文社会の評価について学習するため。
- 人社の評価について勉強するため。
- 自分自身人文社会科学分野で論文を書く側になり、その評価の在り方について考えることが増えたため
- 人文社会系の評価の指標について、どのような取り組みが今行われているのかを知りたかったから。
- iMDについて話を聞くため
- 出版サイドの人の話を聞くため
- 被評価者、評価者、出版社のディスカッションを聞くため
- 池田先生のツールを知るためでしたが、評価の疲れというような言葉に興味を持った。
- オープンサイエンス政策づくりと実践に役立てるため
- 研究評価の在り方の動向を知るため
- 知的関心と、業務上の関心
- 所属する大学の人社系研究評価について検討するための、情報収集とヒントをいただくため。
- 池田先生の講演を聞くため
- ジャーナル評価について関心があったので、情報収集に。
- 特に文系の研究評価手法に関する情報収集

【Q2. 本シンポジウム後、業務の中で取り組んでみたいと思ったことはありましたか？】

はい・・・84.6%

いいえ・・・15.4%

【Q3. 「はい」と回答された方は、どのようなことを取り組もうと考えましたか？】

- リポジトリ改革（やらせてもらえるかは不明だけど）
- 継続的にフォローしつつ、どのように研究成果を出すのがベストな方法か、研究者と考えていきたいです。

- 評価する側の視点を考慮した自らの評価の在り方を考えること
- 引き続き人社系研究の評価について、検討と試行を続けます。
- 研究だけでなく教育の成果を評価する中で用いることが出来ないかと考えた。
- 今日紹介のあったウェブをまずよりよく知りたい
- 学術政策に生かせることがあると思うので、今回のシンポジウムの内容について、さらに勉強したい。
- オープンサイエンスの推進
- 体制の在り方
- 評価まではまだ応用できないが、研究が何のために行われているのかをもう少し注意深く着目したい。
- 学内の教員評価、組織評価に考えを反映していきたい。
- 研究成果の可視化、また、遅れていると言われている学会の中で情報発信など。
- 評価の尺度について考える。
- 「質」をどう示すか。被引用でない仕組みで。
- オープンサイエンス政策づくりの参考にする
- 研究所内での評価への提言
- iMD の試用
- 今日報告された多様なアプローチを参考に、弊学に合う取組みを検討したいです。
- 人文社会系では書籍が重要と知ったので、ジャーナルと関連付けて考えてみたい。
- 学内議論の実施

【Q4. 今後、同様のシンポジウムが開催されたら、また利用したいと思われますか？】

はい・・・100%

【Q5. 本シンポジウムについて、率直な感想やご意見をお聞かせください。】

〈感想〉

- 指標がないのも困るが（今の人文系？）ありすぎも困ること（Twitter、FB、DL、・・・ETC、ex）ぐるなび）、EvaluationからAssessment（大学の価値）への移行、デジタル時代の研究成果の発表スタイル←特許の審査システムみたいなのが良いかもなど、いろいろ考えさせられました。

- F1000など、とても新しい動きも知ることが出来、国内大学の教育面からの評価、評価自体の根本からの再考など、とても刺激的でした。
- 評価される側とする側の、両方の声が聞けて良かった。国内と海外両方の登壇者がいたのも知見を得ることが出来た。
- 色々な立場の方の意見が聞けて参考になりました。
- ディスカッションで「遅れている」とされた日本の学会の評価軸が、今のところキャリアとしての研究者になるための評価に直結している点は大きな問題だと思った。
- 国内外の有識者の話が聞けて、有意義であった。また松本さんの話は、評価以外にも大きく感じる場所があった。
- 評価指標についてすでに様々な試みが（特に多様性の尊重を行いつつ）、行われていることが知れたこと、また人文社会科学に携わる側からの成果の可視化をすすめる必要のあることを確認出来て有益だった。
- 登壇者ごとに、様々な切り口での評価を提案しており、新たな世界観や評価指標を考える上でのエッセンスを吸収できた。
- 「評価する側」として、日本としては、新聞社だけが設定されているのには、違和感を感じました。新聞社が悪いというのではなく、その建付けが乱暴に見えるのではないかという意味です。
- オープンリサーチの考え方は大変参考になりました。
- とても示唆に富んだシンポジウムであったと思います。大変勉強になりました。ありがとうございました！
- 研究評価について、いろいろな面から知ることが出来て興味深かった。
- 大変参考になりました。iMDのように、特に文系の業績を評価できる方法を、当方も考えたいと思いました。
- 政策側の立場として、投じた税金の効果を求められる（人文系に限ることでないが）。投じた税金の使い方が有用であることを理解してもらうために、研究の社会的価値、社会的成果をどう社会に発信していくべきか、考えたい。

〈意見〉

- パネルディスカッションはやや消化不良だと感じました。本来のテーマから広がりすぎて発散してしまった感じです。
- あまりこのようなウェブを使うことがなく（e.g. Open source系）、情報が多くて、消化するのに少々時間が必要かと思いました。各ウェブについて登壇者からの簡単な説明があると助かります。

- 議論が組織と個別の研究でやや混乱している点が多くなった。
- 指標そのものについての議論まで至らなかったように感じた。また、評価についても一般的な評価のモデルのようなものをみんなで共有したほうが、議論が深まるのではないかと思った。

【Q6. 今後、本シンポジウムにどのようなことを期待されますか？】

- とても面白かったので、報告書はもちろんのこと、対談集みたいなものを出したらどうでしょう。
- 今回のように、多様な立場の人の意見を聞ける場として期待しています。でも時間はマネージしてください。
- 多くの地方大学では、この種の議論は始まってもない状況です。広く発信されるとともに、議論の機会を増やしていただけると嬉しいです。
- よりインタラクティブに参加できる形式での実施を期待します。
- 今回のように、大学関係者以外の人の参加による活発な議論
- 指標をどう活用するか。自然科学と人文学の特徴の違いに基づいた評価方法
- 日本の教育、大学運営なども含めた、多角的な視点での、今後の研究力強化に向けた道筋についてディスカッションする場が増えると嬉しいです。
- 人文社会系について考察するイベントを今後も開いてほしい。
- 引き続き論文数と引用数に偏重しない、より健全な評価の文化づくり。
- 後藤先生が言われているような、人文系研究のプロセスの見える化の方法、発信方法。
- 年2～3回、定期的な開催（情報発信）をお願いします。

【Q7. その他のご意見、筑波大学、ならびにURA活動に期待することなどがありましたら、お聞かせください。】

- とてもおもしろかったです。
- COTREはデザインもアイデアも素敵なウェブサイトだなと思いました。
- 学位や研究の質の担保および優れた研究者人材の育成、リカレント教育の適切な実施
- 大学側のサポートがもっと欲しいと感じた。例えばORCIDはあるが、活用できていない、など。学校と提携している企業もあるので、どう実際に活用できるのか知りたいです（これは何回かWSに参加した経験をもとに感じた

ことです)

- OBとして応援しています。
- 研究の価値をどう社会に発信していくか。直接的な工法としての貢献、大学の研究戦略の立案での貢献
- 現在のURAとしての活動ではまだ実感はないが、これまで大学にいた経験上、教員と事務職員の意識の溝は、埋めようがない。現在の日本の大学で活躍しているURAの方々は、どう感じておられるのだろうと思う。このような会が、両者の共通認識の場にもなればと思う。
- iMDの発展を期待しております。
- 同じテーマを様々な分野・バックグラウンドの人が掘り下げるイベントに参加したい。

アンケート回答者・参加者

参加者（69名）（事前登録78名）

URA	26%
研究者	21%
事務系職員	35%
研究員	4%
大学院生	6%
会社員	8%
その他	1%

アンケート回答者（26名）

URA	32%
研究者	24%
事務系職員	24%
研究員	8%
大学院生	8%
会社員	4%

以上